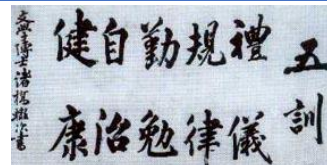




つちおと



「めあて」を定めて 充実した2学期に！

校長 小畑一二美

8月24日月曜日、始業式に臨む子どもたちの姿は、背筋がピンと伸びて、やる気に満ちていました。まず、代表児童3人のめあて発表があり、その後の校長講話では、冒頭次のように話しました。

「残暑の厳しさが続くので、人が近くにいないときにはマスクをはずすなどして熱中症にも気を付けながら過ごしてください。なんといいてもウイルスの侵入を防ぐことが大事です。今までと変わらずに、こまめなうがいと手洗いを心掛けましょう。」



その後、新学期のスタートにちなんで、「めあての立て方」について、輪投げの実演を交えながら子どもたちと一緒に考えました。

まず、絶対に外さない至近距離から輪投げをします。上から輪を落とすだけなので、全部入りました。次に、歩幅3歩分の距離から輪投げをします。今度は、絶対に入るとは限りませんが、近かったので、やっぱり全部入りました。そこで、めあてにするにはどちらがよいかを、子どもたちと考えました。すると、「簡単すぎるとおもしろくない！」という反応がありました。挑戦意欲を引き出すには、ある程度難易度があったほうがよいことが分かりました。「それなら、うんと難しくしよう！」と、歩幅10歩分の距離から挑戦することにしました。輪は、一つも入りませんでした。挑戦した私は投げやりになってしまい、挑戦意欲が湧いてないことが、子どもたちにも分かったようです。

最後に、歩幅5歩の距離で挑戦しました。2個外れましたが、残りは入りました。輪が入ると子どもたちの大きな歓声が上がり、見ていてもおもしろかったようです。2個外れましたが、全部成功した歩幅3歩分の距離よりも、私の挑戦意欲が盛り上がっていることが、子どもたちにも分かったようです。

「めあては、簡単すぎても難しすぎてもよくありません。少しがんばればできそうなめあてがよいです。まぐれでできることもあります。1回くらいできたからといって、「めあて達成」としてはいけません。「いつもできる」「毎日できる」になるまでがんばりましょう。」

と言って、話をまとめました。

全国的には新型コロナウイルスの感染が広がる地域もあり、引き続き警戒が求められる状況です。しかし、三条市では予定通りに2学期のスタートを切ることができて、大変喜んでおります。1学期から延期になった学校行事等も多いので、調整を図りながら充実した教育活動の推進に努めて参ります。保護者、地域の皆様には、変わらぬご理解とご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

三条学園あいさつ運動< 7月27日~29日 >

1学期末の3日間、三条学園がそろってあいさつ運動に取り組みました。裏館小学校では、裏小出身の中学生が小学校に集合して、ニコニコ青空委員会の子どもたちと一緒に取り組みました。PTAや学園運営協議会の役員の皆様も駆けつけてくださいました。

次回は9月9日~11日までの三日間です。ご協力願います。



戦後75年 今伝える戦争の記憶 ～学童疎開先となった三条市～

今年、戦後75年の節目の年を迎えました。ヒロシマやナガサキの原爆記念日や終戦記念日に合わせて行われる慰霊の式典が、今年はコロナウイルス対策で大幅に姿を変えて実施されたようです。

新潟県でも、長岡空襲の犠牲者への慰霊の思いが込められた花火大会が中止となりました。戦後75年を迎え、体験者や語り部が減少する中、空襲の惨禍を忘れぬように、記憶の伝承が待ったなしの課題です。

さて、夏休み中に裏館小学校の歴史を調べていると、戦争にまつわる悲しい出来事があったことを知りました。それは、学童疎開です。

記録によれば、学童疎開した東京都江東区立数矢小学校の3年生から6年生が、三条市に生活していたそうです。彼らは、宗正寺などを宿舎として、そこから裏館小学校・一ノ木戸小学校・四日町小学校の三つの学校に通って勉強しました。初めは修学旅行みたいで楽しく過ごしていましたが、親元を離れたさみしさが身に染みて、就寝時になるとみんなで東京を想い、涙を流してこらえたそうです。

上の回想録を読むと、長岡空襲が三条から確認できたことが分かります。最近では「ヒロシマ・ナガサキ」と聞いても、「原子爆弾」が連想できない若者も増えていると聞きます。社会科の歴史学習等、様々な機会を通して、戦争の惨禍の実態を継承し、平和を願う気持ちを育てる取組を、着実に進める必要があると思います。

疎開先での生活

大澤 晨

昭和十九年八月、三年生以上五百二人を引率して、新潟県三条市に集団疎開しました。子どもたちは九つの寮に分かれて生活しました。私は、裏館国民学校で数矢の六年生の授業にあたりました。

新潟にも各地に空襲があったので、三条市の外（下田村）へ疎開しました。その直後、長岡市に大空襲があり、空が大紅蓮の炎で真っ赤に染まるのを、声もなく見つめていたことが思い出されます。なつかしい数矢国民学校の付近の家々もこのように焼けたのではないかと悲しい思いがしました。

終戦後、ぼつぼつと父母が子どもを引き取りに来ました。寮生が減少していくと、残された者は、自分の家族は無事なのか、なぜ音信がないのかと不安がっていました。教師も寮母も慰めようのない気持ちでいっぱいでした。東京都からの引き上げ命令が、二十一年三月に届きました。

（江東区立数矢小学校記念誌回想録より）

すてきな日本画を寄贈していただきました！

この度、日本画家の阿部誠一様より、裏館小学校に二つの日本画を寄贈していただきましたのでご紹介いたします。阿部誠一様は、校区在住で県央日本画サークルに所属して制作活動をされています。これまでに、三条市展に複数の作品を出品し、入賞の実績のある方です。

「工事現場」と「鍛冶道場」の、二つの作品を寄贈していただきました。いずれも、縦・横が1.2m・1mのかなり大きな作品です。ふるさと三条がテーマになっています。子どもたちにとっては、日本画を鑑賞して構図や色づかい等を学ぶ絶好の機会となります。「本物の日本画・実物の日本画」から、多くのことを学び取ってほしいものです。

当面、校長室に展示して、興味のある子どもたちが希望すれば、近くで鑑賞することもできるようにしたいと思います。

